

---

# 王子様と私

yukina

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王子様と私

### 【Nコード】

N3697R

### 【作者名】

yukina

### 【あらすじ】

凜華の日常がある日を境に一変する。突然現れた金髪碧眼の王子様？そんな彼からの突然のプロポーズ？彼と彼女のラブ甘な物語は周りを巻き込みつつ進んでいきます！

## 突然のプロポーズ？（前書き）

初投稿の作品です。小説自体初めて書いたので拙い部分が多いと思いますが、大目に見てもらえたら嬉しいです。

## 突然のプロポーズ？

「園村 凜華さん！あなたに一目ぼれしました！結婚してください！」

目の前には金髪の一人の男が三つ指をつけて土下座していた

驚いて固まっていた凜華だが、その男も言葉を発してからずっとその体勢を保ち続けピクリとも動かない

いつまでそのままなんだろうか

もしかして、私が何か言うまでそのままとか…

途方にくれた凜華はとりあえず浮かんだ疑問を彼に問うことにした  
土下座をしている彼に立ったまま質問をするのもどうかと思った凜華は彼の前に同じように正座をする

「あの……私、あなたと初対面だと思っただけど……どこかで会ったことありましたっけ。」

その日もいつもと同じように一日を終えるはずだった

ホームルームが終了した後、帰り支度を終えた凜華は友人に別れを告げ、そのまま家に帰ろうと教室を出た

友人の少ない凜華は、放課後誰かと一緒に過ごすということはめったにない

いつものように靴を履き替え校舎を出ると、校門のあたりがなぜか騒がしい

不思議には思ったが自分とは関係のないことだろうとさして興味のない凜華はそのままその隣を通り過ぎようとする

すると、その騒ぎの中心にいた人物が輪の中から飛び出して、通り過ぎようとしていた凜華の腕を掴み引き止めたのだ

「園村凜華さんですよ。突然すみませんが、少しお時間を頂いてもよろしいでしょうか。」

凜華を引き止めたのは22、3歳くらいの男でピシッとスーツを着

こなしたいわゆるイケメン君だった

突然、名指しで呼ばれ引き止められた凜華は、こんなイケメン君、知り合いにいただろうかとその男の顔をじっと見つめる

しかし、いくら見つめても記憶の中から彼のことを思い出すことはなかった

誰かと間違えているのではないかと訝しく思っていると

「おい、一樹！いつまで彼女の腕を掴んでいるんだ！俺だってまだ触れたことがないんだぞ！今すぐその手を離せ！」

突然聞こえた第三者の声に驚いてそちらを向くと、そこには金髪に碧い瞳とさながら王子様のような容姿を持つさらなるイケメン君が自分達のほうに近づいてきていた

一樹と呼ばれた男が近づいてくる彼に気づくと、苦笑しながらも凜華の腕を「失礼しました。」と開放する

そのまま一樹が凜華の傍を一步引くと、今度は金髪王子様（名前がわからないので）が凜華の正面へとまわりこみ、凜華の顔を…いや、瞳をじっと見つめ始めた

突然の金髪王子様の登場に驚いていた凜華だったが、自分を見つめている彼の瞳を凜華もまっすぐ見つめ返した

彼の碧い瞳は凜華に何か強くを訴えているようでその瞳から視線を

はずすことができない

瞳の色はとても穏やかで凪いでいるように見えるのに、瞳の奥深い部分は反対に激しい炎を宿しているように凜華には見えた

その激しい炎に凜華は惹き込まれ囚われる

懐かしさと愛しさをその瞳に感じるのは気のせいだろうか

そうやって二人が見詰め合っていたのはどれくらいの時間だろうか

最初に動いたのは金髪王子様だった

視線をはずした彼は突然地面の上に正座したのだ

そして話は冒頭に戻る





## 突然のプロポーズ？（後書き）

初投稿のお話です。最後まで読んでいただきありがとうございます。

少しでも気に入っていただけたら嬉しいです。

次回は突然現れた彼らについても少しわかるかも？

まだ、主人公のフルネームとスーツの彼の名前しか出ていませんもんね。

土下座させたままなのもかわいそうなのでなるべく早く次のお話がアップできるように頑張りたいと思います。

## 彼との出会い？

「あの……私、あなたと初対面だと思うんだけど……どこかで会ったことありましたっけ。」

金髪碧眼の男性、まるで御伽噺から出てきた王子様のような容姿  
さすがの私も一度会ったなら忘れるなんてことはないと思うのだが、  
やはり思い出すことが出来ない

ただ、その瞳に懐かしさを覚えたことだけが私の中で引っかかって  
いるのだけど…

そうしているうちに、目の前の王子様は、（三つ指はついたまま  
だが）顔だけを僅かに上げ私の質問に笑顔で答えてくれた

「あるよ。」

「……えっ？」

「ちゃんと君に会ったことがあるよ。僕が君に一目ぼれしたのは1

0年前。クラウドが君を僕の元に連れて来てくれたんだ。」

「……………」

その一言を聞いて私は彼を思い出すことができた

10年前……私の過去にあまりいい思い出はない

けれど、そんな中でも大切にしている宝物のような思い出がひとつだけある

そう、彼との思い出だ

ただ、今の彼とは大分様子が違うのだけれど……

「改めて、僕の名前はレイナード・ヴァロアだ。そのむらりんか園村凜華さん、あなたを愛しています。僕と結婚してください。」

彼の真剣な碧の瞳が私を射抜く

その瞳の奥の炎が私の胸を熱くする……10年前と変わらない碧の瞳に

そして、私の答えは決まっている

「喜んでお受けします。私をあなたのお嫁さんにしてください。よろしく願います。」

そう答えると、私も彼と同じように三つ指をつき彼に向かって頭を下げた

しかし、私が頭を下げると同時に、怒鳴るような女性の声が私達に待ったをかけた

「ちよつと待った！凜華、こんなところで何を言っているの！そんな大事なことを簡単に返事しちゃ駄目じゃない！？ちゃんとわかっているの？」

その声の主は私の友人の加賀見祥子かがみしやうこだった

きっと誰かに私の今の状態のことを聞いて、心配して駆けつけてきてくれたのだろう

彼女はとても優しい子なのだ

そして、今の彼女の様子はというと……とても怒っている様に見える  
いったいどうして怒っているのだろうか……？

そんなことを考えながら、何を言えばいいのかと悩んでいると

「レイ、凜華ちゃんもお友達の彼女も、ちょくちょくここは目立ちすぎるからさ、場所を移動しないかい？」

すっかり存在を忘れていたが（ごめんなさい）、一樹と呼ばれた青年が傍にいたことを、二人きりではなかったということを声をかけられることで思い出した

レイナードは彼の言葉を聞き、ぐるりと周りを確認した後（ものすごい数の生徒に囲まれていたのだ）少し苦笑し、私と祥子に「静かなところに場所を移して話そう。」と提案した。

まだ聞きたいことがたくさんあったので私はすぐに頷き、それを見た祥子も渋々ながら頷いた

私が場所を移動しようとその場から立ち上がるうとしたとき、さつと目の前に差し出される手に気がついた

「凜華、一緒に行こう。」

見上げると、レイナードが笑みを浮かべながら私に手を差し出している

ふと、彼の手を見て改めて私は今までの出来事を思い出し、実感した

私は彼のプロポーズを了承したのだと

彼とともにこれからの未来を生きていくということ

そして、彼の差し出されたその手を掴むという行為は、彼とともに歩くその道のりのその第一歩になるのだということ

私は軽く息を吐いた後、気持ちを改め、彼の手にしっかりと自分の手を重ねた

重ねると同時に彼の手が私の手をぎゅっと力強く握る

それに答えるように私も彼の手を握り返す

そんな些細なことがとてつもなく嬉しかった

そして、私は彼の瞳を見つめながら、自分で最高と思える笑顔を浮かべ彼に答えた

「ええ、レイナード、一緒に行きましょう。」

これから先の未来、私達にどんなことが待ち構えているのかわからない

だって、私はあまりにも彼を知らなすぎる

そして、それは彼も同じだろう

でも、彼と一緒にいるのならばどんなことも乗り越えることができ

る……そんな、妙な自信が私にはあった

「ちょっと、その金髪男！凜華の手を離しなさいよ！私はまだ、あなたのことを認めていないんだから。」

「大丈夫、凜華が認めてくれればそれだけで僕は幸せなんだから。」

「なにニヤニヤしているのよ、変態金髪男！……ちょっとそこのあなた彼の友達なんでしょ？ちょっとは彼をとめなさいよ！」

「申し訳ないけどそれは遠慮させてもらうよ。彼に恨まれたらその後が怖いんでね。」

「もう、なんなのよ〜！」

3人の様子を私はレイナードの傍で微笑ましく眺めていた

みんな、仲良くなれてよかったとほっとしたのだ（仲良くなんてなっていないわよ！BY祥子）

私の彼との第一歩はとてにぎやかなものとなったのだ

## 自己紹介？

「えっと…、ねえ、レイナード。私、一人で座れるから降ろしてもらっても…？」

「そうよ、さつさと凜華から離れなさいよ、セクハラ男！」

不機嫌な様子を隠すことなくレイナードを睨みつける祥子。  
レイナードはというと　　うん、あまり、堪えてはいないみたい。

なぜ、こんなことになっているのかというと、私が座っている場所が問題で…そう、実は私、彼の膝の上に座っているのだ。  
車に乗ったときからずっとこの状態。

車で彼の家へと移動中の私達。  
運転手の高木さん（乗る前に紹介してくれた）と助手席に座っている一樹さん、同じ後部座席に座っている祥子が同じ車に乗っている。一樹さんなんてさつきからにやにやとこちらを見ているし、ああ、本当に恥ずかしい…。

乗車する際、彼は私をひょいと抱き上げ、その体勢のまま車に乗り込み、気がついたら私は膝の上。  
慌てて降りようとしたのだが、いつのまにかがっちり腰に手を回されていて動くことができず、今現在も継続中。

降ろしてほしいという願いもむなしく相変わらずの状態の私。  
それを見ている祥子の機嫌がどんどん急降下していて、なんだか殺



気だつてきているような…はあ、どうしたらいいんだろう。

「リン、リンはそんなに僕と離れたいの？僕はやっと君に再会できたんだから一瞬だつて離れたくないんだ。リンは違うの？そう思つてはくれないの？」

彼はずるい。そんな縋るような目で見られたら拒否なんて出来るわけがない。

私だつて、恥ずかしくはあるけれど、本当はそれと同じくらい嬉しくも思つているのだから…。

「離れたいなんて…そんなこと思つていません！私だつてまたこうしてあなたと会えることが出来てとっても嬉しいです。ただ…この体勢をちよつと恥ずかしく思つているだけで…」

「凜華、そんなのにほだされちゃ駄目よ！セクハラするような奴にはもつとはつきり言つてやらなくちゃ！」

うっん、祥子、かなり怒つているみたいだなあ。

祥子が私のことを大事に思つて言ってくれているのはわかつているんだけど、祥子とレイナードには仲良くなつてほしいんだけどなあ、はあ…。

「ちよつと、あんた。凜華が下ろしてと言つているんだからさつさと凜華を離しなさいよ！だいたい、人前で平然とやつてるあんたの

ほうがおかしいのよ。」

祥子の言葉にレイナードはにこりと微笑みかけると、今度は私に向かって優しく囁いた。

「リンも嬉しく思ってくれてるのがわかって僕も嬉しいよ。恥ずかしいんだったら、僕が君を隠してあげる。君の恥ずかしがる可愛い顔を他の人には見せたくないからね。」

そう言うと、レイナードは私の顔を彼の胸に引き寄せ、私をぎゅっと抱きしめた。

……レイナード、祥子の言葉はスルーですか。

祥子の顔が引きつっていたみたいなんだけれど……。

「ちよつと！私のこと無視しているんじゃないわよ！」と全く聞く耳を持たないレイナードに諦めたのか、それとも大人しく彼に身を任せる私を見て諦めたのか、はあ、と祥子の吐いたため息の音が私の耳に届いた。

「凜華がそれでかまわないなら私はもう、何も言わない。全くもつて無駄みたいだしね。でも、これから先、レイナード、あなたが彼女を傷つけるようなことをしたら、そのときには容赦はしないからね。覚えておいて！」

その言葉を聞いたレイナードはぎゅっと私を抱きしめる腕に力を込めると「絶対に傷つけたりしない。彼女は僕が守るから。心から君に誓うよ。」とそう祥子に力強く答えた。

ああ、私は本当に幸せ者だ。  
こんなに大切に思われている。愛されている。

「ねえ、リン。レイナードじゃなく、昔みたいにレイと呼んでくれないか。やっと君の事をリンと呼ぶことが出来るようになったんだあと、君にも昔みたいにまたレイと呼んでもらいたい。それに、僕たちの間に敬語は不要だよ。」

「レイナード…ううん、レイ。わかったわ。でも、本当にもう一度こうやってあなたの名前をを呼ぶことが出来る日がくるなんて夢見たい。もう呼ぶことは叶わないかもしれないと思っていたから…。あなたが私のことをリンと呼んでくれるのもとっても幸せ。ねえ、レイ。もう一度リンと呼んで？」

「リン…リン、愛しているよ。そして、ありがとう。」

「なあ、レイ。そろそろ、俺のことも彼女達に紹介してくれてもいいんじゃないか？っていうか、お前、俺のこと忘れていただろ。」

「悪い悪い。忘れていたわけじゃないんだけど、でも、ううん、ちよっと忘れていたかな。彼女と再会できたことがあんまりにも嬉しくてね。」

レイは少し悪戯っぽく笑うと、私と祥子に向かって彼を紹介してく

れた。

「リン、祥子さん。改めて紹介するよ。彼の名前は工藤一樹くわどうかすけ。僕の幼馴染であり、親友だ。そして、僕の仕事のパートナーでもある。多少、口が悪いのが玉に瑕きずなんだけど、とってもいい奴だよ。仲良くしてやってくれないか。」

「口が悪いなんて失礼な奴だな、お前。レイといると、いろいろ口うるさくなっちまうんだよ。しかたないだろ。」

「それじゃ、改めて自己紹介な。俺の名前は、工藤一樹くわどうかすけだ。レイがいていたとおり、子供の頃からのつきあいだ。仕事も一緒にしている。レイの秘書のようなもんだな。まあ、俺達にいろいろ疑問に思っていることもあるだろうけれど、まあそれは追いつ追いつ説明するとして、とりあえずよろしくな。ああ、俺もレイ同様敬語とかは勘弁な。」

彼は助手席からこちらのほうに覗き込むとこちらに向かってにっこりと微笑んだ。

私は二人の今までのやり取りを思い出し、レイと一樹さんがお互いを大切に思っていてお互いを何より信頼しているんだなあと思然と感じていた。

そして、レイに一樹さんのような友人がいることをとても嬉しく思っていた。

私も挨拶しなくちゃと姿勢を正し（といっても、レイの膝の上でなただけれど）、「園村凜華です。こちらこそ、よろしくお願ひします。」と改めて彼に挨拶をしたのだった。

「じゃあ、私も自己紹介させてもらおうとするわ。名前は加賀見祥子<sup>かがみしょうこ</sup>。16歳。凜華のクラスメイトで親友よ。凜華とは高校からのつきあいだけれど、私、凜華のこと大好きなの。だから、彼女が傷つくようなことは絶対に許さない。

凜華には絶対に幸せになつてほしい。結婚に関しては、高校生の私達にはまだ早いと思つてる。けれど…凜華が幸せそうに笑っているから…不本意だけど少しはレイナード、あなたのことは認めてもいいわ。それと、私のことは祥子と呼んで。ちゃんとかさん付けなんて性格に合わないの。ということで、レイナード、一樹これからよろしくね。」

私の自慢の親友はそう言った後綺麗な笑顔を私達に向けた。

新居？（前書き）

## 新居？

「レイナード様、到着いたしました。」

お喋りに夢中になっていている間に目的地に到着したようだ。

未だレイの膝の上に乗っていた私はやっとこの状態から開放されるのかとほっとしていたのだが、あいにく彼のほうはそのつもりはなかったらしい。

「ひゃっ！レイ！おろして、恥ずかしいから！」

高木さん（運転手さんね）が扉を開けてくれて、さあ、外へ降りようとした瞬間、なんと、レイは私の膝裏に腕をいれ、そのままお姫様だっこ状態にしてしまったのだ。

今まで以上に恥ずかしい体勢に顔だつて真っ赤になっているだろう。案の定祥子がレイを非難していたが、（祥子の言葉は聞こえていないらしい）レイは高木さんに荷物をお願いするとそのまま目の前の建物へと足を向けた。

目の前にある建物はそれはそれは立派な高級高層マンションだった。

レイは「さあ、行こう。」とばかり、私を抱えたままマンションの中へと入っていく。

器用にカードキーを懐からだし鍵をかざし扉を開くと、入り口に立っていたガードマンの横をすり抜け中へと入っていく。

入り口に入ると、綺麗な受付？のお姉さんがフロントよろしく座っていて、私達に「お帰りなさいませ。」という声をかけてきたのだが、私は羞恥のため返事をする事が出来ず、それでも失礼にあつたてはとなんとかレイの胸にうつむけていた頭をこくりとひとつ返したのだった。

意図したことではなかったのだが、その動作がレイの胸に擦り寄るような形になってしまい、レイはそれに対し至福の笑顔を浮かべ受付の女性の顔を赤らませることになるのだった。

それを見た祥子は眉間に皺を寄せレイを睨み、一樹さんは必死に笑いを押し止めていた。

…といつても、うつむいていたせいで私は知る由もなかったのだけ  
れど。

レイを先頭に私達はエレベーターに乗り込み、いざ、目的地へ向かう。

少しして止まったエレベーターから降り、やっとレイはゆっくりと私を地上へと降ろしてくれた。

ほっとしたのと同時にちよつと寂しいと思ってしまったのは内緒だ。そして、私が少し落ち着いて周りを見回すと、その先に見えた扉はひとつ。えっ？ひとつ？まじですか？

「リン、ここが僕たちの新居だよ。」

「え…？」

さあ、入ろうかとレイは私の手を引き、先ほどと同じようにカー  
ドキーで扉を開錠した。

言われるがまま、家の中へと入っていく私。もちろん、後ろには一



樹さんと祥子もいる。

概観がかなりの高級感溢れたマンションだったため、中はどんなにか煌びやかだろうかと少し気後れしていたのだが、一步踏み入れた扉の内側は予想とは違っていた。

確かに普通のマンションよりとても広くきれいな玄関ではあったのだが、そこはそれだけじゃなかった。置かれている家具、壁紙、絵画に花と。

数は多くはないけれど、センスよく置かれたそれらはとても優しげな雰囲気を周りにかもし出していた。

レイの趣味なのだろうか。

飾られた花も野花を思わせるような可憐なもの。

決して華美ではない。けれど、その家の顔ともいえる玄関に入っただけで、この家の主人が温かく迎えてくれているのだという気持ちが出るまで伝わってくるようだった。

「リン、気に入った？リンはこんな感じが好きなんじゃないかと思つて用意したんだけれど…。もちろん、一緒に暮らし始めたらリンの好きなようにしていい。ただ、これは僕なりに君を喜ばせたいと思つてしたただだから…。さあ、早く部屋に入ろう。まだまだ見せたいものがたくさんあるんだ。ああ、君の荷物も届いているはずだしね。」

レイは早くといわんばかりに私の手を引いて奥へと導いていく。

ちよつとひつかりのある台詞を言われたようなきもしたが、興奮していたせいかそのときは気がつかなかった。

奥の扉を開けると、そこは一面がガラス張りの大きなリビングだった。

木で作られた家具を中心に整えられたその部屋はやはり温かみを持つて私を迎えくれたが、それよりも先に大きな窓から見える景色に

惹きこまれてしまっていた。

今日はとても天気がよく、まさに快晴。そして、そこから見える景色は絶景。どこまでも遠く先を見通すことが出来そうなそんな景色だった。

「どう？ 気に入ってくれた？ 君が高所恐怖症とかじゃないかだけが心配だったんだよね。でも、その様子だとその心配は杞憂だったみたいで安心したけど。この景色、君に見せてあげたかったんだ。いや、二人で見たかった。」

「…言葉も出ないくらい素敵な景色。レイ、ありがとう。そんな風に思ってくれて私も嬉しい。」

レイに微笑みながらお礼を言うと、レイも同じように微笑み返してくれた。

そのとき、ふと、視界の隅に少し古ぼけたピアノが目に入る。

「このピアノ、レイが弾くの？」

「うん、あんまり上手じゃないけどね。ピアノを弾いていると心が穏やかになるようなそんな気がするんだ。実際、何度もこのピアノに助けられたよ。かなり愛着があつてね。かなり古すぎるものなんだけれど、新しいものに変えたいとは思えないんだ。だから、一緒に連れて来た。さて、もし君がご所望とならばいつでもピアノを弾くよ？ どう？」

それはとても甘い誘惑だったのだけれど、今はまだいろいろなことをしなければいけないからとかなり残念な気持ちになりながらも私はそれを断った。

さつきから祥子がいらいらしているのにも気がついてたし…。

「レイ、凜華ちゃん、紅茶が入ったから冷めないうちにどうぞ。」

お茶の用意をしてくれたらしい一樹さんに促され、私達はソファへと場を移すことにした。

ソファへと座った私達を確認した祥子は待ってましたといわんばかりに口を開く。

彼女の様子からして、まさに戦闘開始といったところだろうか。

「さて、レイナードさん。聞きたいことがいろいろあるんです。もちろん、あなたに拒否権なんてありませんからね。」

## 新居？（後書き）

お話、遅くなりました。

なかなか、話の進展がないですね。

もうちょっとぐだぐだと続きそうですが、もう少しお付き合いください。

それでは、今回もお話を読んでいただきありがとうございます。

彼は何者？

「レイナード。聞きたいことがいろいろあるんです。もちろん、あなたに拒否権なんてありませんからね。」

「どうぞ。僕もそのつもりだったし。君に納得してもらわないとリンも悲しむからね。」

「じゃあさっそく聞くけど、あなたいったい何者ですか？こんなに用意周到にいろいろ用意しているということは、凜華のことを今までも見ていたんじゃないんですか？だったらなんで10年もの間ほっとしていたりしたんですか？」

凜華、ずっと一人だったのに……。」

「うん、そうだね。リンのことはずっと見ていたよ。といっても直接は見ていない。まず、僕とリンのことを話そうか。君は不思議に思っているんじゃない？どこで出会ったんだろうつて。」

祥子はそれにひとつこくと頷く。

私とレイの出会い。それは、10年たっても色あせない私の小さな幸せな記憶。孤独だった私の温かい大事な思い出。

レイが私を見つめ、話していいかい？と無言で問いかける。

私は祥子に私の過去について話したことはなかった。

信用していなかったということではなかったが、どうしても話せなかった。

私自身が過去に一人で立ち向かう力がなかったからかもしれない。過去の孤独の闇がまた自分を飲み込んでしまっんじゃないかと。

でも、レイと再会した今、私は一人ではない。だから……うん、大丈夫。

私はレイの瞳を見て笑顔で頷くと、レイも笑顔で答えてくれた。

「まず、僕のことからね。2人はヴァロアグループって聞いたことない？結構有名みたいんだけど、かなり大きなグループ会社だね。僕はそこの社長の次男なんだ。」

「ヴァロアって……。そんな大会社のお坊ちゃんなんで……？」

「ああ、確かに大会社のお坊ちゃんっていうのは否定しないけれど、僕は会社継ぐとかそういうことは一切ないよ。兄さんがいるからね。それに、もう一樹と二人で新しく会社も興しているし。」

「なんでわざわざ……。お兄さんがいるんだっいたらその人が社長になるにしても、あなただってそのまま入ればそれなりのポストが用意されるんじゃないの？」

「僕はいいんだよ。僕は僕の好きなようにする。兄さんは……社長になるべく育てられた人だから……。僕はラッキーなんだよ。選ぶことができる。ああ、べつに兄さんとは仲が悪いわけではないよ。今だってたまたまに連絡を取り合っているしね。お互い忙しいから頻度は少ないけれど。」

とにかく、僕は僕で今は好きなことをしている。それでようやくリオンを迎える準備が整ったから迎えに来たんだ。」

「とりあえず、会社関係のことはいいです。じゃあ、なんで凜華に会いにこなかったんですか？凜華のことずっと監視していたんでしょっつ。」

「監視、なんてひどいなあ。見守っていただけだよ。あと、理由だけど。会っていない間ほとんどは治療をしていたんだよ。」

「治療？」

「リンに出会った10年前、僕は療養の目的である場所に向かったんだ。そこでリンに出会った。そのときの僕はまるでミイラのように包帯にぐるぐる巻きにされた状態だったからね。動くことも喋ることも出来なかった。その姿のままリンを迎えにいけなだろう？」

彼は何者？（後書き）

お話、お待たせいたしました。

今回のお話から二人の過去へと触れていこうと思います。

なかなか一日が終わりませんが、もう少しおつきあいください。  
少しシリアス寄りになるかな？

次話はあまりあけないように頑張りますね。

お話、読んでいただいてありがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3697r/>

---

王子様と私

2011年4月30日14時14分発行